

ラジオ放送
＜平成28年10月～12月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.417

もくじ ~ contents

< 昔むかし >

☞ 金光教的むかしばなし

- 第1回 ハナと雀とスイカ *page 1*
- 第2回 お喜久と市助 *page 4*
- 第3回 偏屈者の吾一じいさん *page 7*
- 第4回 四人の兄弟 *page 10*

< 信者さんのおはなし >

☞ 信徒の体験談です。

- 神様を杖に *page 13*
- 道頓堀で神様と *page 17*
- 生かされている喜びでいっぱい *page 20*
- すぎる場所があってよかった *page 24*
- 神様が見つけてくれたお嫁さん *page 28*
- ここに来てよかった *page 32*
- 神様からの贈り物 *page 36*
- 金光教に出合えて *page 40*
- 神様と二人暮らし *page 44*

《昔むかし》第一回

「ハナと雀とスイカ」

昔むかし、ある山あいの小さな村にハナという女の子がおりました。

ハナの家の近くには、奇麗な小川が流れていきます。そこには小さな魚も泳いでおりました。

暑い夏には、ハナもその小川で水遊びをするのが大好きでした。そしてハナのそばでは、いつも雀のチユン助が羽を。パタ。パタさせながら水浴びをしておりました。

この雀は、小さいころ、巢から落ちて弱っていたのをハナが見付けたのです。ハナはいつもお父さんから、「命を大切にしなさいよ」と教えられていましたので、とても可哀想に思い、わらでおうちを作

り、大切に育てたのです。そして子雀に「チユン助」という名を付けました。チユン助はもうすっかり大きくなり、ハナをお母さんのように思っているみたいでした。

ある時、嵐が来ました、いつもの嵐と違って、それはそれはひどい嵐と大雨の日が三日三晩も続きました。お父さんもお母さんもハナも、せっかく育てた畑の作物がどうなっているかとても心配でした。

やっと嵐が去り、お日様がカンカン照っております。みんなは畑に行き、倒れてしまった作物の後始末に大忙しです。ハナの肩に止まっているチユン助の、「チユンチユン」という鳴き声が、皆を励ましているようでした。

帰りに小川に行ったハナは大層驚きました。何と、透き通るような川の水が茶色になっていたのです。お父さんは、「これは嵐のせいで二日もすれば元の川に戻るだろう」と言いました。

けれど、何日経つても川は奇麗になりませんでした。お父さんは村の人たちと山に登り、川上の様子を見に行きました。しかし途中で大きな岩が道を塞ぎ、それ以上は登れません。皆ため息をつくばかりです。

ハナは良いことを思い付きました、「ねえチユン助、山に飛んで行って川の様子を見てきてよ」

チユン助はすぐに飛び立ちました。しばらくして戻つてくると、「ハナ、大変だよ。山の崖があちこち崩れて泥水がどンドン流れているよ。山の上の大

きな池も泥水でいっぱいだ」と言いました。

川はいつまで経つても元の川に戻りません。その内に行きずりの旅人が川にゴミを捨てるようになりました。きつと、「こんな汚い川ならゴミを捨ててもいいだろう」と思ったのでしよう。

以前の奇麗な小川を知っているハナは悔しくなりません。それで、小川の掃除をすることにしました。

ある時ゴミを取り除いておりますと、小川の中ほどに土がこんもりと盛り上がっている所に、何か小さな葉っぱのような物が出ていることに気付きました。それから毎日のように見ておりますと、その小さな葉っぱは少しずつ大きくなり、そしてその先からは、つるのような物が伸びているのに気付

きました。

「一体これは何の葉っぱだろう」とハナは思い、こんな汚れてしまった小川に何か新しい命が誕生しているようで、うれしくなりました。

何日かすると、つるの辺りに小さな丸い物が付いていました。さらに何日かするとまた大きくなっています。よく見ますとその丸い物にしま模様があるではありませんか。ハナは急いでお父さんを呼びに行きました。

お父さんはつくづくこれを見て、「へえー、ハナ、これはスイカだよ。こんなに汚れた川でもスイカは一生懸命に生きているんだねー。こんな所で小さな種から命が生まれ、すくすく育つなんて、天地のお恵みって凄いなあ」

ハナは胸がワクワクしてきました。

気のせいか、小川の水が以前より奇麗になったよ
うな気がします。

「月日が経ったら、また前のように奇麗な川になり、魚が戻って来るかもしれない」

ハナはそう思うと、とても楽しいことがいっぱい待っているような気がして、毎日のようにチュン助と仲良く小川を見に行くのでした。

そしてスイカは元気に大きくなっていききました
と。

おしまい。



《昔むかし》第二回

「お喜久と市助」

昔むかし、ある海沿いの村に大きな屋敷を構えるお大尽がおりました。お大尽とはお金持ちのことです。そこにお喜久という年頃の一人娘がおりました。美しいという評判でしたが、しかし…。

「お喜久、またご飯を残すのかい、もつたいないことじゃ。お天道様に申し訳が立たん。だからいつまで経つても痩せておるのじゃ」とおばあさんが言いますと、「おばあ様、このおかず嫌いなんです」と答える始末です。

そうです。お喜久は好き嫌いがとても激しく、一人娘を甘やかせて育ててしまったと、親たちはもう諦めて、おばあさんばかりが小言を言ってお

りました。

さて、ある時お喜久は海辺を歩いておりました。とても気持ちの良い晴れた夕暮れ時で、今まで行つたことのない岩場の方に行きました。岩場は足元がつるつるしておりましたし、そこへいきなり大きな波が来て、お喜久は波にさらわれ、海に落ちてしまいました。

泳ぎが出来ない上に着物を着ておりますから、溺れそうで息が苦しくばたばたもがくばかり。お喜久はもう死んでしまうかと思いました。

それを畑仕事帰りの市助が目ざとく見付けました。市助は上着とわらじを脱ぐやいなや海に飛び込み、ばたばたしているお喜久をやつこのことで助け、浜辺まで連れて行きました。

お喜久は市助にお礼を言おうと、市助を改めて

見直しますと、たくましい体付きと、りりしい顔

なあ」と言いました。

立ちの若者です。市助はもう上着を着て、わらじを丁寧（とうぜん）に海の水で洗い、腰に挟んでおります。その様子をお喜久がブーツと見ておりますと市助が、「さあ」と言つて背中を向けました。

「え？」

「お大尽の所の娘さんだろう？ 履物が無くて

は歩けんだろう、俺が負ぶつてやる」と言つてもう

一度背中を向けました。

お喜久は恥（は）ずかしさに戸惑（戸）いながらも、「あな

た様のお名前は……？」と聞きますと。

「おれは市助と言う名だ」

「私は喜久と申します」

市助は道を歩きながら、「お喜久さんは着物がぐつしよりぬれているので、重いかと思つたが、軽い

背中でお喜久は真つ赤になりましたが、それを

ごまかすように、「市助さんは、わらじを履かれな
いのですか？」と聞きますと、「ああ、一日わらじ
に働いてもらったから、お礼を言つてさつき海で奇
麗にしたからな」と言いました。

「お礼？」

「そうだよ。俺の家は貧しくて、冬におつ母さん
がわらじを編んでくれる。俺はそのわらじのおか
げで畑仕事が出来る。だから毎日わらじを奇麗に
してお礼を言つてるんだ。わらじだって天地の恵み
のおかげで出来る物だからな。大切にしないと」

お喜久の家は大騒ぎでした。が、市助はお喜久
を送り届けるとさつさと帰つてしまいました。

その日の晩ご飯時に、お喜久が市助のわらじの話をしますと、おばあさんがポンとひざを打って言いました。

「全くもってその通りじゃ。お喜久は海で命を助けてもろうて市助さんにお礼を言うたが、お喜久が毎日食べている物に、お礼を言うたことがあるのかい？ 毎日頂いている天地の恵みの食べ物がお前を生かして下さっているのじゃ。これからは食べ物にお礼を言わねばな」

お喜久はなるほどと、その言葉が素直に心に残りました。それに市助におぶられた時に、「軽いなあ」と言われたことも恥ずかしく思っていたのです。

それからのお喜久は、三度三度のご飯を、お礼を言つて頂くようになりました。すると、ふつくら

としたなおも美しい娘になっていきました。

村の人たちは、海辺でお喜久と市助が楽しそうに話し合っている姿を時々見掛けるようになりました。

そして、お喜久はおばあさんに教えてもらつて、わらじ作りを始めました。作っている時のお喜久の頬は、ほのかに赤くなつておりましたと。

おしまい。



《昔むかし》第三回

「偏屈者の吾一じいさん」

昔むかし、ある小さな村に吾一というおじいさんがおりました。

吾一は村の人たちに「東のじいさん」と呼ばれておりました。家が村の東にあつたからです。そうして当然のように「西のじいさん」もおりました。二人はもうこの村に長いこと住んでいる、古株です。

吾一は子どもがおらず、おばあさんはついこの間、はやり病で亡くなり、一人で暮らしておりました。

吾一は毎日畑を耕しております。

畑の前を通る村人が、「おはよう」と声を掛けますと、「ははーん、こんげな時が早い^いか、わしは一

刻^{とき}も前から畑仕事をしておるわい」と答え、また、次に通った村人が、「今日はええ天気で働^{はたら}きがいいがあるのう」と言いますと、「昼から雨が降るかもしれんわい」と答える偏屈なおじいさんでした。

ある時、吾一は町に買い物に出掛けました。町といつても小さな町で、おまけに小高い峠を越え、三里ばかりも歩いていかなければなりません。家を出て歩いていると、ばつたり西のじいさんに会いました。

西のじいさんは、「なあ吾一よ、一人暮らしは大丈夫か。何か困つたことがあつたら、わしに相談をしておくれ」と言いますと、「ふん！ わしは一人でせいせいしておる」と、憎まれ口をきくのでした。

そして西のじいさんが、「どこへ行くのかい？」と尋ねますと、「どこだろうとわしの勝手だ」と答え

ます。

「もし町に買い物なら、年寄りの足であの峠はきつい。石がゴロゴロしておつて歩きにくいし、ろくに道らしい道ではないからな。町の買い物なら、わしの所の若い者に頼んでやろう」と言いますと、吾一は、「わしは人の世話にはならん。今まで人の世話になつたこともない」と言い捨て、どンドン行つてしまいました。

さて、買い物を終えた吾一が峠の道を、「やはりきついなあ、わしも年か」と思いながら家の近くまで帰ってきますと、何やらただならない心配です。村人が集まり、焦げ臭いにおいが漂ってきます。

「もしや火事！」と思い、痛む足を引きずるようにして走つていきますと、「早く気が付いて良かった」「これぐらいで済んで本当に良かった」と言う

村人の声がします。何と吾一の家が火事に遭つていたのです。

吾一の姿を見て、村人がわらわらと寄つてきました。そして口々に慰めの言葉を掛けてくれました。初めに火事に気が付いたのは西のじいさんで、それから村人を大声で呼び集め、皆で水を掛け、火を消してくれたのです。

顔をすすだらけにした西のじいさんが、吾一のそばに駆け寄ってきました。

「吾一よ、お前が大事にしていた亡くなつた皆さんの形見のくしは、わしが家に入つて取つてきたからな」と言い、懐からやはりすすだらけのくしを出して、吾一に渡しました。

すると大工の芳蔵が、「なあ吾一さんよ、わしが家の修理をしてやろう、何の三、四日もすれば元

通りになるだろう」と言いました。そして村の女たちはもう吾一の家に入って片付けを始めました。

吾一のしわくちやな日に焼けた頬に、涙がぼとりぼとりと落ちてきました。今まで誰の世話にもならず自分でやってきたという思い、そして村の人たちを大切に思っていなかった自分。それなのに、こんなに村人たちは吾一に優しくしてくれるではありませんか。

「神様はわしのかたくなな心を打ち砕いて下さった」。吾一は感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

吾一の家は元通りになりました。大工の芳蔵は、「金などいらん、家にあつた材木をちよこし使っただけだ」と言いました。

吾一は村の人たちへの感謝の気持ちをどう伝え

たら良いか分かりませんでした。

やがて、ある朝早く、吾一はくわを持って、町につながる峠道へと出掛けていきました。

「一年掛かっても二年掛かっても、この峠を村の連中が通りやすい道にしてやるか」
そう思ったのです。

おしまい。



《昔むかし》第四回

「四人の兄弟」

昔むかし、ある村に、働きの夫婦が、母親と一緒に暮らしておりました。三人はとても働きの者で、朝から晩まで田畑を耕しておりました。

けれどもこの夫婦にも悩みがありました。それは、子宝に恵まれなかつたのです。それで、朝夕神棚に向かつて、「早く子どもを授かりますように」と祈っておりました。

やつと男の子が生まれました。みんな大喜びで、松吉という名を付け、それはそれは大事に育てました。そうするうちにまたまた男の子が三人も出来て、それぞれ名前を、竹吉・梅吉・末吉と付けました。

子どもたちは大きくなり、畑仕事を手伝うようになりました。畑も広がり、立派な作物がどんどん実るようになり、お父もお母も、おばあさんも大層喜んでおりました。

ある日のこと、一番上の松吉が言いました。

「おいらはこんな土を耕して一生を終わるなんてごめんだ。町に行つて働きたい」

お父もお母も反対しましたが、言うことを聞きません。

すると、松吉の言葉を聞いていた二番目の竹吉が、「兄やんが町に行くなら、おいらは山で働きたい」と言い、そうしましたら三番目の梅吉も、「おいらは海で働きたい」と言い出しました。

またまた、お父もお母も、そして、今度はおばあさんも反対しました。お父は、「天地のお恵み、

神様のお恵みで、田畑さえ耕せば食うには困らん、わしの後を継げ」と言いましたが、三人の兄たちはそろって家を出て行ってしまいました。

さあ、どうしたら良いのでしょうか。一番下の末吉は、「兄さんたちの分まで働く」と言い、本当に朝早くから日が暮れるまで、一生懸命に畑仕事をしました。

二年ほど経ちますと、二番目の竹吉と三番目の梅吉が盆と正月には家に顔を見せるようになりました。竹吉は山で採れたキノコや、猟師の親方にもらった熊の肉などを土産に、そして梅吉は海の魚を持ち帰り、家の人たちを喜ばせました。それぞれ日に焼けて、一層たくましくなつたようです。

ある時、ひよつこりと町に行った一番上の松吉

が、青白い顔をして帰ってきました。その様子がただならぬので、お父が尋ねますと、「客にだまされた。店の高価な品を、たあんと買うと言われたが、金を支払ってもらえず持ち逃げをされた。ご主人に大層な迷惑を掛けて、もう生きてはいられない」と言うのです。

それを聞いておばあさんは心配のあまり寝付いてしまいました。末吉も心配でいたたまれずに、山と海の兄たちに知らせようと、家を出て走って呼びに行きました。

そうして皆が帰ってきたのですが、寝ていたはずのおばあさんがおりません。探してみますと、裏の竹やぶの所におりました。

そして、「この竹は梅雨の終わりごろ生えてきた。それから、子どもの背丈ほど大きくなつたが、

それから伸びなくなってしまうんだよ。そのころは日照りが続いて雨が降らなかったからね。もう枯れて駄目になるかと可哀想に思っていたら、雨が降ってまた伸びていった。ところがまた日照りがあつて、でも雨が降りまた伸び、その繰り返しで、今ではこんなに高くなり枝も茂るようになった。お前たち四人の子も、今では丈夫で立派な若者になった。この竹のように枯れそうになっても雨の度に伸びていく。ほんに天地のお恵み、神様のお計らいだ。後はもう子どもたちに任せよう」と言いました。

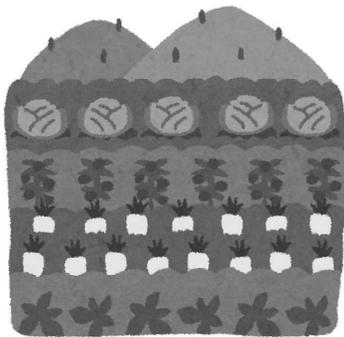
一番上の松吉は、うなだれたまま、おばあさんの言う言葉を心にしっかりと刻んでいくようです。すると、弟の竹吉と梅吉が口をそろえて言いました。

「おいらたち、働いてもらった銭はしっかりとためてある、兄さんそれを使っておくれ」

それから、三年ほど経ちました。

働き者夫婦の畑には、夫婦の他に、すっかりたくましくなつてくわを振るう松吉と、寄り添うように働いているそのお嫁さん、そして末吉の働く姿がありました。そうして赤ん坊をあやすおばあさんの姿も、よく見掛けましたと。

おしまい。



《信者さんのおはなし》

「神様を杖に」

「でも、結婚したら、やめないとね」

日頃金光教の教会にお参りしている孝子さんは、そのことを結婚相手に話してみたのですが、その時に返ってきた答えがこれでした。

（え？ もうお参りするなつてこと？）

孝子さんはとつさに、聞かえなかつたふりをして話題を変えました。教会のない生活なんて、考えられないことだったので。

幼いころから母親に、「神様を杖にしていくんだよ」と教えられて育ちました。その言葉の通り、神様は目には見えないけれど、とても力強い支えになつて下さると、孝子さんは感じていました。教会

にお参りすると、不安な気持ちが一掃と消えて、勇気が湧いてきます。孝子さんにとつて教会は、なくてはならない、安心と元気の源なのです。

でも困ったことに、夫になる人は、信心には全く関心がなさそうです。

初めて顔を合わせたのはお見合いの時。口数は少ないけれど、がっしりした体格で、見るからに男らしく、頼りがいがある人だと思つて結婚を決めました。実際、心根はとても優しいのですが、少々頑固なところもありました。

（この人に信心のことを理解してもらうのは、一生無理かもしれないなあ）

それ以来、孝子さんは、夫の間では信心の話題を封印することにしたのです。

結婚した後も、孝子さんは、夫の目を避けて、

近くの教会に足を運びました。

そして十一年後、関東への転勤が決まり、孝子さんたち夫婦は三人の娘を連れて、それまでの勤務地であった愛媛県から埼玉県に移り住むことになりました。

そこでも孝子さんは、金光教の教会を探しました。人に道を尋ねながらようやく探し当て、お参りすることが出来た時、まるで実家に帰ったような、心安まる思いがしました。教会の先生は、ずっと昔から知り合いだったような親しさで、温かく迎えて下さいました。見知らぬ土地に越して来て、誰一人知る人もない中で、頼れる人やホッと安心出来る場所があるということ、これほど心強く思えたことはありませんでした。

しかしそのころになっても、孝子さんのお参り

は、夫に隠れてのものだったのです。

（正々堂々とお参り出来たら、どんなに気が楽だろうか）

そう思った孝子さんは、ある休みの日に、思い切つて話してみました。

「今日は金光教の教会で毎月のお祭りがあるんだけど、一緒にお参りしてみない？」

「そうか、じゃあ、行ってみようか」

拍子抜けするぐらいにあっさりと、夫は同意してくれました。

これまで必死に隠してきたつもりでしたが、たぶん前々から、夫は知っていたのでしょう。そして、この甲斐甲斐しく尽くしてくれる妻の優しさや朗らかさが、教会参拝に支えられていることを見抜いてもいたのでしょう。やがて一家そろつてのお参り

が実現し、孝子さんはこの上ない幸せをかみしめるのでした。

ところがその喜びもつかの間、夫の体の中に、異変が広がり始めたのです。

夫が五十二歳の時でした。頻尿と腰の痛みが続くので、病院で診てもらおうと、前立腺がんが夫の体を深くむしばんでいました。

「骨や肺にも転移していて、もう手術は出来ないが、ホルモン注射で治療していけば、二年ぐらいは大丈夫だろう」とのことです。医師から説明を聞く間、孝子さんは取り乱しそうになる自分を抑えるのがやっとでしたが、夫の様子を横目で見うかがうと、夫は不思議と、少しの動揺もなく静かにうなずいているのでした。

後で医師は、孝子さんだけに、「先ほどは二年と

言いましたが、実は、一年持つかどうか分かりません」と告げました。

病院からの帰り道、夫の運転で、二人は教会にお参りしました。先生は、一緒に神様に祈って下さり、優しく、しかし力を込めて、こんな話をして下さいました。

「人間は、心配事にとらわれてしまうと、嬉しいこと、ありがたいことが見えなくなってしまいます。神様から命を頂き、守られ続けてここまで来た。そのことにしっかりお礼を申し上げ、希望をもつてお願いしていきましょう。神様は出来る限りのことをして下さいますから、心配せず、何事もお任せしていきましょう」

夫は、心に刻みつけるように、その言葉を黙って聞いていました。

がんの告知を受けて一週間もしないうちに会社から転勤の辞令が下りおりました。なんと、愛媛に転勤せよというのです。「これを機に仕事を辞めて、治療に専念したら」と勧めましたが、夫はかたくなに聞き入れませんでした。

一年持たないかもしれないと言われていた夫は、結局、治療を受けながら三年間、亡くなるぎりぎりまで働き続け、故郷の愛媛で静かに一生を閉じました。孝子さんは、夫を失った悲しみの中にも、神様が出来る限りご配慮下さったことに、感謝せずにはいられませんでした。

闘病中、腰が痛んだり、抗がん剤の副作用で苦しいことがあっても、夫が家族につらさを訴えることは、ついぞありませんでした。それは、元来の辛抱強さと家族への思いやりに加え、神様という目

に見えない杖を得たからでしょう。孝子さんの知らない間にも、夫は時折一人で教会に参拝し、自分の体のこと、家族の行く末を神様に祈り続けていたようです。

「もうやめなさい」と言っていた信心を、いつの間にか本人がするようになり、しかも神様を杖に、生き死にの不安さえ乗り越えた夫。孝子さんは遺影を見ながら語りかけます。

「わずかの間に、あなたの信心は私を追い抜いてしまったのかもね。

あなたはやつぱり、

お見合いの時に思

った通りの人だっ

たわ。かつこよか

った！」



《信者さんのおはなし》

「道頓堀で神様と」

先日お話を伺った田中清三さんは、大阪生まれ大阪育ちの八十八歳。上背があり、肩幅も広く、がつしりとした体格の持ち主です。豊かな白い眉、年齢を感じさせない鋭い眼光が、ひと度話し始めるや、象さんのような優しい目になります。人をそらさぬその話しぶりには、さすがにこの大阪の街で長らく商売を続けてこられた方だと、思わず得心させられます。

大阪と言えば、食い倒れの街。そして、川面に映る両手を挙げて走る人の電光看板や、頭上で手足を動かすカニの立体看板などを思い浮かべる方も少なくないでしょう。

田中さんは、まさにその大阪ミナミ一番の繁華街、道頓堀で飲食店などが入るテナントビルを経営している会社の会長さんです。

田中さんのお宅では、毎朝、コーヒーのいい香りが立ち込めます。父親の好きだったコーヒーを、田中さんが自分の手に入れてお供えしているのです。平成元年に父親が亡くなって以来、どんなに忙しい時でも欠かしたことはありません。毎朝神前に手を合わせ、両親にコーヒーをお供えすることが田中さんの日課になっています。

田中さんに、金光教との出会いを尋ねると、父親のことから話して下さいました。

和歌山県出身の父親が大阪に出てきたのが、小学校を卒業してすぐ。生活のために、既に大阪で働いていた兄弟を頼つてのことでした。それ以来、

ご縁を頂いた人のお世話になりながら、一生懸命働いて信頼を得、店の経営に才覚を現しました。

まだお店に勤めていた時に、父親のアイデアで天ぷら定食を出したらこれが大当たりしたとか、独立してうどん屋を営んだのは良かったのだけれど、場所が悪くて全くはやらなかったとか、お世話になった方に見込まれて飲食店の経営を任されたとか、聞けば聞く程、逸話に事欠かない波瀾万丈の歩みです。

そして、このことをまるで自分のことであるかのように話すその口ぶりからは、田中さんにとって父親がどれ程大きな存在であるのか、感じずにはいられませんでした。

五歳の時のことを、田中さんは、昨日のこのように振り返ります。ある日、父親が、普段見たこ

とのないようなニコニコ顔で帰ってきました。「このおつちゃんに、立派な所へ案内してもらったんや」。

聞けば、当時経営していたキャバレーの店舗改造を頼んだ大工さんに、「江戸堀の金光さん」へ連れて行ってもらい、その教会の先生に会ってきたということだったのです。その先生のところには、願い事を聞いてもらおうと、また、悩み事の相談に乗ってもらおうと、たくさんのお参りの人たちが、わーっと集まってくるのだそうです。

そして、田中さんの父親が、「私を日本一のキャバレー王にして下さい」と言うと、先生は、「よっしゃ！」と即座にひと言、力強く返してくれたそうです。田中さんは言います。「簡単には人を信じない父が、不思議なもので、このひと言で全て信じ切ったんですなあ」。

事実、それ以来、父親は毎日、二度三度と教会にお参りするようになります。そして、事あるごとに、神様をお願いし、教会の先生に相談して事を進めていくようになります。商売の後を継いでくれとは言わなかった父親が、信心だけは、何としても息子の田中さんに受け継がせようとする程に、大きな出会いとなったのです。

道頓堀の田中さんのビルは、元は、父親の経営するキャバレーのあった所です。戦前のこと、教会の先生に相談しながらギリギリの交渉をして、そのお店を手に入れることが出来たのです。教会の先生は、お店を見に来て、「ええ買いモンしたで」と喜んでくれたそうです。そのキャバレーは大きな利益を上げることが出来たものの、一年後には戦争により営業出来なくなり、ついに空襲で全焼して

しまいます。その土地を戦後の混乱期には、文字通り体を張って守り抜いた、そういう所なのです。

戦後、お店の経営に携わるようになり、田中さんは考えました。「これからは、若いも若きも、女性も男性も楽しめるお店にしたい。それなら食堂がよからう。それも道頓堀のこの土地に、どこにも負けない食堂ビルを建てたい」と。そのことを、一つひとつまた神様をお願いし、教会の先生に相談して進めていくことになったのです。そして、昭和三十年に食堂ビルが完成し、今に至っています。

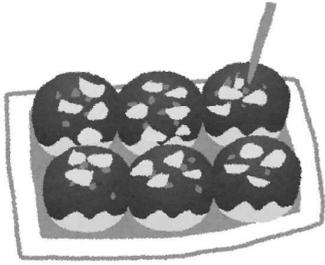
かつては大人の社交場として栄えた街、芝居小屋が人を集めた街が、今では家族連れや若者で昼も夜もにぎやかです。携帯を片手に写真を撮っている外国人も珍しくありません。田中さんのビルにも、若者に人気のハンバーグ店や居酒屋などが

入り、たくさんの人でにぎわっています。同じ土地
であっても、時代が変われば、人の流れも街の表情
も、そしてお店も変わっていきます。

しかし、その一方で変わらないものもあります。

田中さんの父親にとっては、自分が出会った教会の
先生への信頼。田中さんにとっては、父親への感謝
の思い。そして何より神様を信じ、願う心。そのよ
うな、目には見えないものを大切にすることが、
田中さんをここまで導いてきたのではないだろう

か。そして、その今を支
えているのではないだろ
うか。お話を伺ってそん
なふうに思われたのでし
た。



《信者さんのおはなし》

「生かされている喜びでいっぱい」

長い人生の道のりの途中には、様々な予期せぬ
出来事が起こり得るものです。「なぜ、自分だけが
こんな目に遭うの」と悲観的に思うことさえあり
ます。しかし、困難な状況と向き合いながらも、
決して諦めないで一步一步人生を前向きに歩ん
でゆく人がいます。

神奈川県・金光教のぼりと登戸教会に参拝する和田

我あやと八十さんは、一九八〇年生まれの三十六歳。我
八十さんと金光教との出合いは、小さい頃体が弱
かったことから、両親に手を引かれて教会に参拝
したことに始まります。教会参拝の後は、家族そ
ろって食事会に行くのが恒例で、とても仲の良い家

族でした。

ところが我八十さんが二十一歳の時、衝撃的な出来事が起こります。家族思いの優しいお父さんが四十九歳で帰らぬ人となったのです。我八十さんは当初、検査入院だと思っただけに、お父さんの死を受け入れることが出来ませんでした。

ちょうどその時、病院に来ていた教会の先生に、「何であれだけ神様に一生懸命なお父さんが死ななきやいけないの」と涙ながらに訴え、「もう僕は絶対に教会にお参りしない」と言ってしまったのです。

それからの我八十さんは大学を卒業し、亡くなったお父さんが務めていた建築設計事務所に就職することになります。お父さんの分まで頑張りたい。そのような気持ちで、仕事もプライベートも

充実した日々を過ごしていききました。そんな普段と変わらぬ平穏な生活の中、今度は我八十さんに、思いも寄らぬ苦難が襲い掛かります。

仕事の休憩時間に突然、頭をハンマーで殴られたような強烈な頭痛と吐き気に襲われ、倒れてしまったのです。救急車で病院に搬送された時には瞳孔が開く危険な状態で、すぐに頭蓋骨を外す手術が行われました。病名はくも膜下出血。二十五歳にして、まさに青天の霹靂（へきれき）とも言える出来事でした。

集中治療室で三週間、生死の境をさまよいながら、良き医師と出会い、家族の懸命な支えがあり、そして本人の生命力により、三度の手術を無事に乗り越えることが出来たのです。我八十さんは、手術を終えてベッドの上で目を覚ました時、

「ああ生かされたんだなあ」と、今ここに生きていることを実感したそうです。そしてこうして命がつかっているのは、亡くなったお父さんが側にいて助けてくれたのだと思うようになったのです。

ところが、脳出血によつて運動機能を司っている部分がダメージを受け、一生車椅子の生活を余儀なくされる、半身不随となる後遺症を患うのです。

二カ月が過ぎ、リハビリ科に移った時には、会社の先輩や友人たちが毎日のように面会に来て励ましてくれました。たくさんの方々と他愛もないおしゃべりをして、ようやく笑って過ごせる日が来たのです。このことを通して我八十さんは、新たな命を与えられ、新たな恵みの中に生かされていく存在そのものに、大きな価値があることを感じ始め

るのでした。

その後、半身不随を抱えながらも、自ら人生を切り開いていくかのようにつらいリハビリに励んでいきます。病に立ち向かい乗り越えようとするその姿に、神様は応えてくれたのでしよう。一生車椅子生活だと言われていた我八十さんは、杖をついて歩行が出来るまでに回復を遂げたのです。その当時、手術をした担当医は、「今、歩けていることは奇跡だと思いますよ」と話しました。

倒れてから十八カ月後、ようやく退院の時がきました。我八十さんのお母さんは、「歩くことが出来たお礼に教会へお参りに行こう」と我八十さんを教会に誘いました。なぜなら、これまでつらい経験をしてきたお母さんにとっては、教会が唯一の心の支えとなる場所であり、金光教の前向きな教

えを頂きながら乗り越えることが出来たからです。我八十さん自身も、一度は神様から離れていましたが、自分の病気を通して命あることへの感謝の気持ちが目覚め始めていました。そして、お母さんと一緒に教会へ参拝することになりました。

すると教会では、先生をはじめ、待ち構えていたかのように大勢の信者さんが集まっていました。

信者さんたちは、我八十さんが笑顔で話す姿に感激し、涙を流しながら喜びました。そんな温かい雰囲気にも包まれた我八十さんは、その時感じたのです。「自分の笑顔で周りの人たちがこんなに喜んでくれる。生かされた役目とはこのことか」と思い、それから教会へ足を運ぶようになるのです。

教会の先生の話に耳を傾けては、心に残る言葉を書き留めました。自分には聴くことも、書くこ

とも、話すことも出来る。こう考えた我八十さんは、病気を通して得た体験と、教会で得た教えを友人たちに広めようと、ご自身の言葉で伝えたり、文章にして配布したりしています。信心して神様と向き合うことによって、人の助かりを願い、誰かを大切に思えることが幸せなのだと思い付いたのです。

こうして我八十さんは、神様を杖にすれば、幸せに生きていくことが出来ると信じて何事にも前向きに捉えていったのです。

今、我八十さんは建築設計事務所に復職し、在宅で仕事をしています。そして、最大の願いでもあった結婚がかない、さらに奥様のお腹の中には新しい命をも授かりました。

最後に我八十さんは、「大変なことも多々あり

ますが、神様と亡き父に見守られる中、生かされ
た有り難みを感じて、とても幸せです」と話してく
れました。



《信者さんのおはなし》

「すぐる場所があつてよかつた」

話は今からちょうど二十年前にさかのぼりま
す。

奈良県の最南端にある温泉地、十津川村^{とっかわ}で暮
らしている玉田智子さんは二人目の男の子も生ま
れ、幸せいっぱいの生活を送っていました。ところ
が、その次男の智之ちゃんが生後半年ほど経った
ころから血便が出るようになり、しばらくすると
今度は体中に発疹が出、そこから膿^{うみ}が出るようにな
ったのです。これはただ事ではないと、病院で診
てもらったところ、「重度の食物アレルギー」だとい
うことが分かりました。

食物アレルギーと言ってもいろいろです。じんま

しんや発疹が出る程度のものから、重度になると、それに加えてショック症状が起こります。そうになると、血圧は急降下、呼吸困難に陥り、すぐに処置をしないと命を失うこともあるのです。

アレルギーのもととなるアレルゲンを聞いて智子さんは驚きました。小麦、卵はもちろん、何と米、牛乳、そば、肉、魚と、野菜以外はほとんどがアレルゲンだと言うのです。

それからの智子さんの生活は激変しました。アレルゲンの無い食材で離乳食を作っても、体の発疹は治まってくれないのです。痒みかゆがひどく、布団に寝かせるとむずがるので、仕方なく毎晩、朝までおんぶして寝かせていました。

それでも出た膿は乾いて衣服にくっ付くので、着替えをするたびに皮膚が剥がれ、まるで象のよう

に黒くてゴワゴワの皮膚になっていきました。ひと月ほど頑張ってみたのですがどうにもならず、つい入院することになりました。病院の無菌室でステロイド治療を受けて二、三週間経ったころ、象のようだった皮膚が割れ、中からやっと奇麗な皮膚が見えるようになりました。

三カ月後には退院出来たものの、それからまた大変でした。食材には細心の注意を払いながら、また同時に、アレルギーの治療もしていかなければならないのです。

治療のやり方はこうです。免疫力を高めるため、「負荷テスト」と言って、例えば一番大変だった小麦粉の場合ですが、一日目は、アレルゲンである小麦粉をわずか〇・五グラム食べてみて、三十分間、症状が現れるかどうか観察するのです。もし

症状が現れなければ二日後にまた〇・五グラムと、週に三回試してみる。うまくいけばそれを一カ月続け、それで結果が良かったら今度は一グラムを同じように一カ月、次は二グラムを一カ月と、徐々にその量を増やしていくのです。もし症状が出ればすぐにテストは中止、次は数カ月後、あるいは何年か間をあけて、また一からやり直さなければならぬのです。

負荷テストの失敗は、子どもにとって心身ともに大変厳しいもので、またそれを見守る親にとっても大変なストレスでした。失敗すると目の前で可愛い我が子の苦しむ姿を見なければならぬのですから。

そんな毎日の生活でしたが、会社勤めで忙しいご主人に頼ることは出来ません。智子さんはも

う、いっぱいいっぱいになっていました。

そんな時、ふと金光教の教会のことを思い出したのです。実は、智子さんには病気が縁で教会へお参りされている妹さんがいて、その妹さんがいつも教会のことを話してくれていたのです。

智子さんは智之ちゃんを連れて車で四十分かけて教会へお参りすると、先生は智之ちゃんを見て、「可愛そうになあ。信心しておかげを受けような」と優しく言って、一緒に神様に祈って下さいました。

負荷テストは親子ともに不安なものですが、教会ではどんなことでも本気で聞いてもらえるので、たまった思い、やるせない思いを全て吐き出せます。それだけでも智子さんの心は救われたのに、その上いろいろな教えを聞かせてもらえ、勇気も

湧いてくるのです。実際に良い結果が付いてきたこともあって、テストの前には必ず教会へ参拝するようになりました。

先生から、「すぐに頂けるおかげもありますが、時節を待たないと受けられないおかげもありますよ」と言われ、すぐにでもおかげが受けたいと焦る智子さんの心も落ち着くのです。もう、一人で悩まなくてもいいのです。

幼稚園、小学校、中学校と、進学するたびに、担任の先生や同級生にアレルギーのことを話しました。間違つてアレルギーを口にすれば、大変なことになるのですから。

また、同級生と同じ物を食べさせてやりたいと、アレルギーのない食材で給食と同じメニューの弁当を毎日作りました。その弁当作りは、幼稚園から

中学校を卒業するまで実に十一年間、ずっと続きました。

それでも、弁当以外のお菓子など、手違いで小麦粉、卵の入った物を口にして救急搬送されたことが何度もありました。

幼稚園の遠足の時は特に心配しました。そのころの十津川村は少しでも中心部から外れると携帯電話の電波が届かないので、救急車を呼ぶことすら出来ないのです。

治療のいかいもあって、智之ちゃんの食べられる物もだんだんと増えていきました。

そして現在、智之ちゃんは大学二年生になり、一年前から奈良のアパートで一人暮らしをしています。二年前、やっと小麦粉アレルギーにも打ち勝つて、パンも普通に食べられるまでになったので

す。長い長い、アレルギーとの闘いでした。



智子さんは言います。

「もし教会がなかったら、こんなに根気よく治療が続けられなかった。何でも話せる場所、安心を頂ける場所、おすがりすることの出来る場所が、人口わずか三千五百人ほどの村なのに、そんな場所があつて本当に良かった」と。

《信者さんのおはなし》

「神様が見つけてくれたお嫁さん」

九州北西部、玄界灘に面する佐賀県唐津市。

海岸には、長さ約四・五キロの松林が広がっています。日本三大松原の一つとして有名な虹の松原です。海の幸豊かなこの町で生まれ育った市丸善人さんは、今年六十二歳。虹の松原のすぐそばにある金光教浜崎教会にお参りしています。

善人さんのお母さんが嫁いで来られた時、食べることもままならないほど家は貧しく、「神様に助けて頂きたい」と、近所の方に付いてお参りしたことがきっかけで金光教の信心をするようになりました。

善人さんも子どものころから、お母さんに連れ

られて、教会に参拝するようになり、還暦を過ぎた今も、毎日、教会にお参りしています。「神様のおかげで、今の自分があると思うと、お参りせずにはおれないんです」と話す善人さん。

小学校低学年のころ、体と心の調子を崩したことがあります。体は火照り、心は不安定になって、寂しさと不安が広がってくるのです。そんな時は、いつも教会にお参りしていました。神様のそばに行くと、不思議と心が落ち着き、安心を取り戻したというのです。

中学生のころには、不安な気持ちが襲ってきて、心の中で、「金光様、金光様」と唱えると自然と気持ちが落ち着くようになりました。

中学を卒業して左官の弟子入りをした時のこと、親方の家にあいさつに行くと、金光教の神様

がお祭りしてあり、驚いたことがありました。その後、仕事を変えて一人暮らしをするようになった時にも、自宅のすぐそばに金光教の教会があり、お参りすることが出来たのです。

親元を離れて不安な時期に、行く先々に神様がいて下さり、どれほど心強かったことか分かりません。

善人さんは、「今、振り返ってみると、いつも神様が先回りして、私を待っていて下さり、守って下さっていました」と話します。

二十歳を過ぎて地元に戻った善人さんは、教会の青少年活動にも加わるようになり、参拝を続けていました。教会の先生は、いつも善人さんのことを気に掛けて、祈って下さり、人生の節目節目に、いつも善人さんを導いて下さいました。

善人さんの結婚に関わって、こんなことがありました。

段々と年を重ねるなか、なかなか結婚相手が見つからず、何度も何度もお見合いをするのですが、いつも断られてしまうのです。教会にお参りしては、良き結婚相手が見つかるように、神様にお願いを続けていましたが、三十代を過ぎても結婚は決まりませんでした。そんな中、四十二歳の時のことです。教会に参拝されているある方が、一人の女性を紹介して下さったのです。ところが、その女性には小学六年生になる女の子がいると聞いて、善人さんは、会うこともせず断ってしまいました。

すると不思議なことに、その日を境に胸に何かがつかえるような気がしてならないのです。数日経

つてもその胸のつかえは取れずになりました。これはどういうことだろうと考えているうちに、ふと、

「良い結婚相手が見つかるようにと神様にお願いをして、教会の先生にも祈って頂いておりながら、自分の勝手な都合で会いもせずに断るというのは、自分が間違っていた」と強く思われてきて、すぐさま教会に参拝したのです。

教会にお参りすると、先生が、「この間のお見合いの話、まだお断りが出来たらんが…」と話し掛けて下さり、「やっぱり今度、会います」とすぐさま返事をして、お見合いをすることにしたのです。すると気になっていた胸のつかえは、いつの間にか消えたのでした。

お見合いの後、善人さんは、六年生の娘さんのことが気になりながらも、その女性とデートを重

ねていきました。そして、デートの約束をしたある日、いつものように教会にお参りすると、先生が、「善人、その娘さんを神様の氏子として大事に育てさせてもらうたら、市丸の家も立ち行くぞ」とおっしゃったのです。娘さんのことで、まだ迷いのあった善人さんは、先生の言葉で覚悟が決まりました。そして、ちょうど、その夜のデートの時、女性から、「娘に会って頂けますか？」と尋ねられ、すぐさま、「いいよ」と素直に彼女の気持ちに応えることが出来たのです。その後、話は順調に進み、無事、結婚することが出来たのでした。

「もし、あの時、教会の先生のお言葉がなかったら、娘さんに会うことをためらい、きつとまた断られていたと思うのです」と善人さんは当時を振り返ります。

奥様と結婚されて、二十年が過ぎました。善人は変わらず教会へのお参りを続けるなかで、自分の心が大きく変わってきたと次のように話します。

「夫婦喧嘩をすることもありますが、神様が見付けて下さった嫁さんですから悪口は言えませんが、嫁さんを悪く言うのは、神様に文句を言うのと同じです。嫁さんのことを悪く言うよりも、自分の心を改めないと信心になりません。今、そんな風に思えるようになったことがありがたいのです」と。

当時小学生だった娘さんも既に結婚し、女の子が生まれました。善人さんにとつての初孫です。可愛くて仕方のない孫の写真を車のキーホルダーに付けて、いつもその写真に語り掛けています。お孫

さんの手を引くように、「さあ、行くぞ」と写真に
一声掛けて、善人さんは今日も教会へお参りに向
かいます。

《信者さんのおはなし》

「ここに連れてよかつた」

奈良県の北西部に信貴山しぎさんという山があります。

標高四百三十七メートルのこの山は、聖徳太子
が、「信ずべし貴ぶべき山」として「信貴山」と名付
けたそうです。

その信貴山の麓ふもとにある金光教王寺教会に参拝
する北谷千加子さん、六十五歳。親しい方はもち
ろん、教会の先生や奥様からも、「ちかちゃん」の
愛称で呼ばれています。年齢を感じさせない可愛
らしい印象から、つい釣られて、「ちかちゃん」と呼
んでしまいそうな、呼びたくなるような、初めて会
ったと思えない親しみを感じます。

千加子さんは結婚して四十一年になります。金



光教の信心をしていた夫のご両親が、千加子さんを娘のように優しく温かく迎え入れてくれ、その喜びが今も千加子さんの大きな支えになつています。

そのご両親はすでに亡くなり、現在は三歳年上の夫と二人暮らし。息子と娘はそれぞれ家庭を持ち、近くに住んでいます。月に一度、教会の先生に来てもらい、自宅の神棚でお祭りをしていきますが、四人の孫たちを含め三世代十人が揃います。お祭りの後、皆で食事をすることも楽しみで、料理に腕を振ります。

千加子さんの信心は嫁いだから、お義母さんに連れられて教会にお参りしたことから始まり、ご両親が信心のお手本でした。

ご両親の信心は、お義父さんが病弱だったこと

がきっかけでした。お義父さんは会社の行き帰りに教会に参拝し、自分の体のことはもちろん、家族のこと、親戚や知人のことまで神様に祈っていました。何度か入院を繰り返しましたが、病院でも同じ部屋の方のお世話をしたりと、心配りの出来る優しい人でした。お義父さんは口癖のようによくこう言っていました。「神様をお願いしたら、何でもさせてもらえる」。これは、千加子さん夫婦の信心の礎になっています。

お義母さんは、どんなに荒れた天気の日も、毎日教会にお参りしていました。特にお義父さんが入院している時は、病院へ行った帰りに必ず教会へ足を運びました。お義父さんの様子など教会の先生に話を聞いてもらうこと、そして先生の話を聞くことが何より楽しみでした。神様に打ち明ける

つもりで、うれしいことも心配なことも全て話し、聞いてもらおうと安らぎと力をもらえるようでした。そして家に帰ると、疲れていても明るく家事をこなしていました。千加子さんは仕事に出ているので、家事や子育てに苦勞を掛け、お世話になったと今も感謝の思いを忘れません。

千加子さんは縫製の仕事を長年続けていて、今の会社では自動車に関わる部品を縫っています。仕事を始めたころ、黙々と大量の製品を縫い上げていく千加子さんをねたましく思えたのか、こっそり手を抜いて千加子さんに負担を掛けようとする人がいました。しかし、そのことは仲間から知らされるまで全く気が付かなかったようです。なぜなら、千加子さんにとっては、大好きなミシンの仕事がうれしくて、一枚でも多く縫えることがただ

だ喜びでしかなかったからです。

「何十枚、何百枚と同じ物を縫っても使うのは一人の人だよ。使う人に喜んでもらえるような物を作ることが大切ですよ」という教会の先生から頂いた言葉を胸に、使うミシンに感謝しながら取り組む毎日です。

ある日こんなことがありました。一日の仕事を終えてタイムカードを押している時、通り掛かった工場長から、「何をブツブツ言っているの？」と尋ねられ、ハツとしました。今日も一日無事に仕事をさせて頂いたことにお礼を言っていたのです。

千加子さんは知らず知らずのうちに、お礼の言葉を口にするようになっていました。それは、夫の全克まさかつさんの影響でした。全克さんは先天性の脊椎せきつひの病気で体が不自由になり、杖を頼って歩きま

す。一本だった杖が今では二本必要です。転んで何度も肋骨を傷めました。全克さんはそんな自分をふがいに思っても不思議ではないのに、「だんだん転び方が上手になった」と言います。

全克さんは毎日、朝起きるとまず目が覚めたことに感謝し、休ませてもらった布団にも手を合わせ、車を運転して教会参拝に向かいます。車を止めて、教会までどんなに時間が掛かっても一歩一歩杖にお礼を言いながら歩き進み、神様に祈ります。

日曜日など、野球の記録員や審判にと声が掛かると喜んで出掛け、後輩の育成にも務めます。仕事をしている千加子さんに代わって、買い物にも出掛けます。神様をお願いして出掛けると、車の乗り降りを手伝ってくれたり、買い物カートを押

してくれたりと、まるで神様が手を貸して下さいかのように、誰かが助けてくれます。

そして、夜寝る時には一日のお礼を申し、休ませてもらう布団にもまた手を合わせ、一日が終わります。

全克さんは何事もうれしくありがたく受け止め、その時の喜びを千加子さんに話さずにはいられませんが、

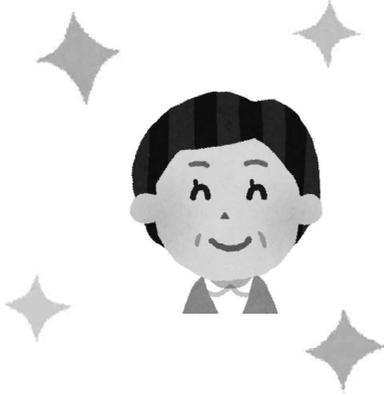
いつしか千加子さんもバイクに乗る時、お手洗いへ行く時、どんな時にも何かを始める時には、「ありがとうございます」と言つて取り掛かり、終わるとまた、「ありがとうございました」と、口にするようになりました。

そんな千加子さんに、実家のお母さんが亡くなる前、「ちかちゃんは幸せやなあ。お母さん心配な

いわ、安心や」と言ってくれたのです。親孝行が出来たかなと思うと、うれしい限りでした。

「北谷の家に嫁いで来て良かった」

持ち前の素直さで何事も神様にお願ひし、お礼の心を大切にしたり喜びあふれる生活に、この上ない幸せを感じている千加子さんでした。



《信者さんのおはなし》

「神様からの贈り物」

古くから港町として栄える、玄界灘に面した佐賀県唐津市呼子町。日本三大朝市として知られる呼子の朝市には、有名なイカを始めとする新鮮な海産物が並び、多くの観光客で賑わっています。

その呼子町にある金光教呼子教会に幼いころからお参りをする平本暢子さんは、今年五十五歳になるご婦人です。笑顔を絶やさず、夫と一人息子との暮らしのありがたさを語ります。

「ありがたい」という文字は、「有ることが難しい」と書きます。実は暢子さんにとって、子どもを授かることは、まさに、「有ることが難しい」ことでした。

暢子さんが二十七歳の時のことです。風邪をこじらせ、微熱が半年ほど続いたある日、仕事場の保育園で急に具合が悪くなり、救急車で病院へ運ばれました。両側の卵巣脳腫が破裂しているという診断で、緊急手術となりました。

手術後、担当の医師から、「卵巣の全部を摘出せずに、かろうじて良い部分は残しておく方法を選択することが出来た」とうかがい、大変な中にもおかげを受けたことに感謝しました。

そんな大手術を受けた暢子さんですから、「もう赤ちゃんを産むのは無理だろうな」と感じていました。その後、縁あって夫と出会い、結婚してから二年くらい経った時のこと。教会の先生が、子どものことについて、いろいろとお話してくれました。その時にハッとしました。「教会の先生は決して

諦めずに、子どもが授かることをずっと神様に祈ってくれているんだ」と同時に、「神様、神様」と言いながら、自分勝手な心で子どもを諦めていたことに気付かされたのです。

暢子さんはすぐに産婦人科へ行きました。検査を受けると、赤ちゃんを授かるには、相当に難しい状態であることが判明しました。しかし可能性はゼロではないとのことで、相談した結果、自然受胎を前提とした治療方法を取ることになりました。

その後なかなか結果は出ませんでした。ついにその日がやってきました。「もしかして……」。そんな体の具合を感じ診察を受けると、お腹に新しい命が宿っていたのです。

暢子さんは当時を振り返りながらこう言いま

す。

「私はもちろん大喜びでしたが、病院の先生は『奇跡だ！ 奇跡だ！ これは神様からの贈り物だね！』と大騒ぎで、『学会で発表するよ！』と興奮を抑えきれない様子でした。難しいケースであることは分かっていたもの、その姿を見て、私が思っている以上に難しいことだったんだなあ、改めて実感したんですよ」

教会の先生や家族に祈られ、神様の大きな働きに包まれている喜びを感じながら、暢子さんはその後、無事に男の子を出産することが出来ました。金光教には、「子を産むは、わが力で産むとは思うな。みな親神の恵むところぞ」という教えがあります。暢子さんにとっては、本当に神様に産ませて頂いたなあ、という思いでいっぱいになった経

験でした。

暢子さんはそれほどの「有り難い」体験をした後、教会にお参りするなかで、先生からは、「何も無いことは当たり前ではないんですよ」ということを繰り返して教えられていきました。「何もないことは当たり前ではない」。毎日の変わらない、平穏な生活こそがありがたい、ということ。そのことを頭では分かっている、心からそうは思えていなかったのでしょうか。

月日が経って、そのことに気付かされる出来事が五年前に起こります。暢子さんは二回の交通事故に遭うのです。

一度目は春先でした。車を運転していて、右折しようとして対向車が通り過ぎるのを待っていた時のこと、後ろから四トントラックに追突されたので

す。外傷は無かったのですが、頭が重く、ひどく気分が悪い状態のまま救急車で病院へ運ばれました。体の左半分がとても熱く感じるのに、測ってみると熱は無い。真つすぐに歩いているつもりでも自然に体が左に寄っていく。下を向くと気分が悪くなる。真つすぐに歩いたり、下を見たり、そんな今まで当たり前だったことが出来ない…。

暢子さんは退院してから、車に乗ることが不安な日々が続きました。

それでも少しずつ車に乗ることが出来るようになった、その同じ年の夏の終わり。

今度は運転中に、突

然に対向車線から右折してきた車を避けようと



して、壁に衝突してしまいました。この時も救急車で運ばれましたが、入院はせずに済みました。

暢子さんはこの二回の事故の後、しばらくして自分の姿を冷静に振り返ることが出来たと語ります。最初の事故の後、当たり前のことが出来なくなってしまう自分。不安を乗り越え車を運転することが出来るようになったのに再び事故に遭った自分。

そんな自分の姿を通して見えてきたのは、教会の先生から何度も何度も教えられた、平穏な毎日のありがたさ。そして、「何事も神様にさせて頂く」という言葉をいつも使いながら、それが形だけで、心からそうは思えていなかったこと。

暢子さんは瞳を輝かせながら言います。「神様に子どもを産ませて頂いたなあと感じていたのに、

いつの間にか、『何事も自分がしている、私がしようと思うから出来るんだ』と捉えてしまっていたんです。そのことに対して、今やっとそれは違うのだと言えるようになりました。『することの出来るおかげを頂いているからこそ出来るのだ』と気付かされたんです」。

暢子さんは今、生活の中で起きてくる全てを「神様からの贈り物」として、毎日を生き生きと過ごしています。



《信者さんのおはなし》 「金光教に出合えて」

昨年開業した北陸新幹線の新高岡駅から数十分。はるかに立山連峰をのぞむ富山平野にある金光教石動教会いするぎに参拝する大浦ふじ子さんは現在六十九歳です。

ふじ子さんには三人のお子さんがいます。若いころは公務員として働き、仕事と家事、そして子育てにと忙しい毎日を過ごしていました。

二十七歳の時でした。年末調整の事務作業に追われていた大みそかの夜、次男が突然、高熱に冒されたのです。次男は、生後半年で髄膜炎にかかり、障害を持つ身となりました。

「この子を、何とか治してあげたい」といろいろな

方に相談をしますが、「子どもに障害があるのは母親が悪いからだ」と心ない言葉に度々責められることもありました。その後、養護学校に通うようになり、そこで出会ったのが、同じように障害のある息子さんを持つ金光教石動教会の奥様でした。

教会の奥様とは知らず、いつも明るく生き生きした人だと思っていた。

ある時、ふじ子さんの長男が東京の私立大学に進学するため、「授業料などの費用が多額で、毎月の収入では、どうしても赤字になってしまう。どうしたらよいだろう」と、教会の奥様に悩みを相談しました。「それなら、うちの先生に話を聞いてもらったらどう？」と言われて、初めて教会に参拝することになりました。

神様がお祭りされている右脇に設けられた「お結界」と呼ばれる場所に座っている先生に、ふじ子さんは、長男の学費のこと、次男の障害のことを話しました。

すると先生は、「それはご神愛ですよ」と話しました。「ご神愛？」と尋ねると、先生は、「神様の愛と書きます」と答えて下さいました。意味が分からないながらも、ふじ子さんは先生の温かいお話の口調に、胸のつかえが下りて、救われた思いがしました。先生に話をするとなんか楽になる。つらいこと、苦しいことが、安心と喜びに変わっていく。そんな気持ちで湧き起こってくるのでした。

教会にお参りすると、神前に金光教の教えの中心である「天地書附」という額が掲げられていて、そこには、「おかげは和賀心にあり」という教えが

書かれていました。それは、どんな困難なことが起こっても、自らの心を和らいだ喜びあふれる心にしていくことで、全てがおかげになっていくということを表しています。

お子さんが障害を持ちながらも、どうしていつも教会の奥様は、明るく生き生きとしているのか不思議に思っていました。これで合点がいききました。そして教会の奥様がいつもそばにいてくれたことも、ふじ子さんにとって大きな励みとなっていました。例えつらく苦しいことが起こってこようとも和らぎ喜ぶ心で乗り越えていく、そういう生き方があるのだということ。ふじ子さんは知ったのです。以来、時間があると車で三十分掛かる道のりを、喜び勇んで参拝し、いつしか義理のお母さんまでも一緒に参りするようになりました。

ふじ子さんは、公務員を退職の後、高齢者介護のボランティアを二十五年続けてきました。「この経験があればこそ、両親の介護も苦しい思いをせず、みやすくさせて頂くことが出来ました」と話します。

「いつか自分が、たとえ寝たきりになっても、『おかげは和賀心にあり』という教えのように、ベッドの上でも有難いと思える心にならせてもらえたらと思います。不平不足を言っていたら幸せになれません」

ふじ子さんの心はそのように育てられていきました。

ふじ子さんは話します。

「毎日さまざまなおことがあり、楽な日は一日もありませんが、心の持ち方で変わってきます。何が

あつても、ヒヤヒヤ、ドキドキしなくなりました。たとえつらく苦しい時でも、教会にお参りすると、そんな私を神様が何もかも受け入れて下さるよう感じます。子どもが熱を出すたびに、神様にお願いとすると、すつと熱が下がる。ここへ来れば何とかなる。先生に話を聞いてもらうと自然に自分の心が楽になっていくのです。次から次へと様々なことが起こるのが人生ですが、そのたびに大きな災いは小さく、小さな災いは無くなるように感じます。先生がいつも神様にお祈りして下さっているという安心出来る、安らぎの心を持たせて頂く稽古が大切なんです」

ふじ子さんは、全ては神様がして下さった意味のあることと思ひ、安心の日々が送れるようになってきたのです。

大学を卒業して、結婚して横浜で働いていた長男が、家族そろって富山に帰ってきて、今は一緒に住んでいます。最近、ご主人が大病でしたが、お嫁さんが主人の食事の世話をしてくれています。近所の方からは、「あんたみたいにお嫁さんと同居して、幸せな人はおらんわ」と言われます。現在次男は施設で安らいだ日々を送り、長女も近くに嫁いでいます。

当初、長男の大学進学時に費用が足りないことで悩んで参拝したふじ子さんでしたが、無事に学費を納めることも出来ました。

初めて教会に参拝した時、先生の言われた「ご神愛」。「神の愛」と書く、その言葉の意味がだんだんと分かってきました。全て一切の出来事は私たち人間の助かりを願って下さる神様の愛情と感じ

るのでした。

「例え難儀なことが起こっても、和らぎ喜ぶ心を大切にする生き方で想像出来ないほど大きな大きなおかげを頂くことが出来るのです」

こうして、ふじ子さんは、金光教と出会い、今までを振り返り、晴れやかな笑顔で話して下さいました。



《信者さんのおはなし》

「神様と二人暮らし」

「えっ本当に九十六歳なんですか?!」

富山市にある神通教会にお参りの高井三枝さんの第一印象です。髪は、少し白髪のあるどちらかという黒髪。薄化粧して、聡明で上品な話しかた。そして時折見せるチャーミングな笑顔。どうしたらそんな風に歳を重ねることが出来るのでしょうか。お話を伺いました。

三枝さんの実家は、母親が熱心な金光教の信者で、子どもころから教会にお参りしていました。昭和十三年、父親の転勤で家族は、満州に渡り、三枝さんもタイピストとして働くようになります。昭和十九年、ご縁を頂き、満州で結婚をしま

した。けれども、戦争は激しさを増し、三枝さんの夫も二カ月後、招集されました。時を同じくして、父親が亡くなり、三枝さんは満州から実家のある富山に引き揚げました。

帰って数日後の昭和二十年八月一日から二日に掛け、アメリカ軍による富山大空襲がありました。その日、三枝さんは、防空壕くわうごうにいましたが、家はB-29の爆撃を受け大破しました。とっさの判断で、防空壕を飛び出し、川に飛び込んだことが幸いし、奇跡的に命を助けられました。

富山市街地の九十九・五%が焦土となったと言われる大空襲の中、「これは、神様のお守りあったこと」と三枝さんは思いました。そして、命を助けられた感謝の気持ちですが、ますます神様を信じる強い気持ちになっていくのです。

家を焼け出された三枝さんは、農家の末っ子だった夫の実家に身を寄せることになりました。そこでは、総勢二十四人の食事の仕度をする日々が続きました。しかし、戦争が終わっても戦地の夫は、いつ帰るとも分かりません。末っ子の嫁がいつまでもここでお世話になるわけにもいかない。ましてや、神様に助けられたこの命。この先、私の成すべきことはなんだろうと、そんな思いが三枝さんの中に湧き上がってきました。

そこで、三枝さんは思い切って、夫の実家を出て暮らす決心をしました。この先どうなるのか不安はありましたが、神様にお礼をしたいという強い思いの中、道がついていきました。

昭和二十一年四月、まだ戦後の混乱が続く就職難の中、自ら富山にある大手企業に売り込み、

三枝さんは働き始めました。仕事だけでなく、生かされた自分が成すべきこととして、自ら婦人会を発足させ、女性の労働状況改善のため、動き始めるのでした。

その後、シベリアに抑留されていた夫も帰宅した昭和二十五年、三枝さんに卵巣腫瘍らんそうのうしゅが見付かり、手術をしました。思いの外、病気が進行しており、手は尽くしてもらいましたが、全てのうみは取り切れませんでした。退院後、三枝さんは、教会の先生に頂いたご神米を頼りに、傷口の痛みも気にならず家事に務めました。

ご神米とは、神様のお米と書きます。天地の恵みのシンボルである、祈りの込められたお米が小さな和紙に包まれています。その神様のお徳が込められたご神米を頂き切り、元の暮らしが出来るよ

うになりました。本当にありがたい気持ちでいっぱいでした。

しかし、この様子を間近で見ていたはずの夫は、いつこうに神様を信じようとはせず、三枝さんの信心にも理解を示してくれませんでした。戦争に翻弄ほんろうされ、傷ついた夫でしたが、だからこそ一緒に信心をしてほしいと三枝さんは、常々思っていました。

三枝さんが思い切って夫に理由を尋ねると、「お前は、いつも俺を責める」と言われ、驚きました。自分は、一度も夫に不足を言わずにいたつもりでしたが、口にしなくとも、「なぜ分かってくれないのか」という不満が、態度に現れていたのだと気付きました。「これは、申し訳ない。この神様は、慈しみの神様、人助けの神様なのに、こんな狭い心で、人

を責めていては神様は喜ばない」と気付き、神様にお詫びしました。「責めない心」に取り組むうちに、夫も共に信心するようになっていきました。

三枝さんは、改めて、助けて頂いたお礼として、神様の喜ぶ人助けをしようと思い、ボランティアで、老人家庭奉仕員を六年間勤めました。さらに、生け花に出合い、生け花を教えるようになりました。

その生徒さんに三枝さんは、今もいろいろな相談を持ちかけられると言います。ある方が、「町内の役をいつもやらされて、嫌でならない」と言われたことに、「皆さんに信用されているから、健康だからこそ出来ることなんですよ。喜んでやらせてもらいましょよ」と話したそうです。

神様から教えて頂いた、人を責めない心。そして

これまで神様にすがって歩んできた経験。そのことが、三枝さんの包容力とそこからじみ出る慈愛の言葉になり、自然と相手の心が和らぎ、何かと相談を持ちかけたくなるようでした。

三枝さんは、現在一人暮らしをしていますが、不自由することはないと言います。教会の先生が、「三枝さんは、一人暮らしというより、神様と二人暮らしですからね」と言われ、なるほどと思いました。身の回りのことも全て自分で出来、日々神様とお話しながらの三枝さんの暮らしは、まさに神様と二人暮らし。

それが、チャーミングな笑顔の秘訣なのだと言えられました。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

